

いわゆる五十肩の治療検討

厚生連滑川病院整形外科 竹 林 俊一郎

機械化導入により農業は近代化された反面、青年層の農業忌避、専業農業の不安定さ、生活水準の向上を求めため兼業農家は増加傾向にある。昭和51年の当病院外来患者の調査では専業農家27.7%、兼業農家と非農業従事者は72.3%であった。従って農家の苛酷な労働、加えて農業従事者の老令化により農夫症としての腰痛、肩関節痛を訴える患者は依然減少していないのが現状である。

今回、過去5年間当院整形外科において肩関節周囲炎・五十肩の診断がついた患者を調査しその治療成績を検討、若干の症例を供覧する。

いわゆる五十肩について

いわゆる五十肩として肩関節周囲炎・五十肩は同一疾患ともいわれ、その病理・解剖学的所見は解明されていない点もあり異論もあるが、本稿では肩関節周囲炎は、外傷性または非外傷性に起る肩板及びその周囲・上腕二頭筋腱の炎症により肩関節の疼痛・運動痛を来したと思われるものとし、石灰沈着症は肩関節周囲炎に含めた。一方、五十肩は一般に

40才以後に好発し肩関節の疼痛と運動制限を来すもので硬着疼痛肩または凍結肩ともいわれるものとした。その誘因は外傷・過労などによるものが多く、原因として肩板周囲の滑液囊の癒着、上腕二頭筋長頭腱の癒着、関節滑膜の慢性炎症などがあげられる。

調査対象は昭和47年から昭和51年まで5年間に当院整形外科外来を訪れた肩関節痛を訴える患者で、頸部脊椎症などの頸椎疾患、項・肩甲部筋肉痛（いわゆる肩こり）を除外し肩関節疾患に限った。

調査結果及び検討

5年間の外来患者総数 3,106人中肩関節痛を訴えるものは254人(8.2%)、このうち頸肩腕候群(68人)は頸部の筋・神経・血管に病変があって肩関節部に疼痛やしびれを訴えるもので正確には肩関節疾患でないと思われる。慢性関節リュウマチまたは多発性関節痛として肩関節痛を訴えるものは13人、肩関節の打撲・捻挫・脱臼・骨折即ち外傷が28人であった。肩関節周囲炎と五十肩は145人(4.7%)に達し、その疾患の割合は逐次増加している。(表1)

表1 肩関節痛を訴える患者の疾患別頻度

年 度 (昭和)	47	48	49	50	51	計
外来患者総数 (人)	584	523	423	576	1,000	3,106
いわゆる五十肩 (人)	14(2.4%)	19(3.6%)	18(4.3%)	28(4.9%)	66(6.6%)	145(4.7%)
(肩関節周囲炎)	(12)	(14)	(12)	(21)	(41)	(100)
(五 十 肩)	(2)	(5)	(6)	(7)	(25)	(45)
頸肩腕症候群	10	7	11	14	26	68(2.2%)
関節リュウマチ・多発性関節痛による肩関節痛	2	5	3	2	1	13(0.4%)
肩関節の外傷(打撲・捻挫・脱臼・骨折)	7	1	4	3	13	28(0.9%)
計						254(8.2%)

表2 いわゆる五十肩患者の年齢別頻度

	いわゆる五十肩	肩関節周囲炎	五十肩
20才～29才	8	8	0
30才～39才	8	8	0
40才～49才	19	14	5
50才～59才	42	25	17
60才～69才	39	24	15
70才～79才	26	19	7
80才～	3	2	1
計	145	100	45

表3 いわゆる五十肩患者の検討

		いわゆる五十肩 (145人)	肩関節周囲炎 (100人)	五十肩(45人)
年 令		平均56.9才 (21～90才)	平均55.4才 (21～90才)	平均60.2才 (48～80才)
男 女 比		79人：66人	55人：45人	24人：21人
左右別	右 側	70人	47人	25人
	左 側	56人	41人	15人
原 因	打撲、外傷	13人	13人	0人
	骨折	4人	2人	2人
	麻痺	8人	4人	4人
X線 所見	石灰化	7人	6人	1人
	骨萎縮、骨硬化	5人	4人	1人

表4 いわゆる五十肩患者の治療と成績の検討

治 療 方 法	いわゆる五十肩		肩関節周囲炎		五 十 肩	
	計 145人中	改 善 度	計 100人中	改 善	計 45人中	改 善
1. 鎮痛・消炎剤(注・薬)	15人	3人(20%)	14人	3人	1人	0人
2. リハビリのみ	19人	2人(14%)	15人	2人	4人	0人
3. 鎮痛・消炎剤+リハビリ	11人	6人(55%)	10人	5人	1人	0人
4. ステロイド注入(+消炎剤)	26人	10人(38%)	23人	9人	3人	1人
5. ステロイド注入+リハビリ (+消炎・鎮痛剤)	68人	34人(50%)	34人	16人	34人	18人
6. 手術(石灰化摘出) とマニプレーション	3人	3人(100%)	2人	2人	1人	1人

患者の年齢分布をみると、年齢は21才から90才まで平均56.9才で、肩関節周囲炎は平均55.4才、五十肩は60.2才であった。(表3)肩関節周囲炎は20才代、30才代にもみられ緩やかな山型をなすが、五十肩は50才、60才代に峻い山型を呈していることが判る。(表2)

次にいわゆる五十肩患者に対して検討してみた。男女比は5.5：4.5で男性に多く、左右別では利き手と思われる右側が約50%を占め両側が12%であった。本疾患の原因の判明したものについてみると、骨折を除いた外傷によるものが13人でいずれも肩関節周囲炎で、この中打撲11人、野球によるもの1人、重量物挙上によるもの1人であった。骨折後の疾患は4人、即ち肩関節周囲炎2人(鎖骨々折1人、前腕骨々折1人)、五十肩2人(colles骨折1人、鎖骨々折1人)であった。麻痺によるものは8人即ち肩関節周囲炎4人(片麻痺2、進行麻痺1、腋窩神経麻痺1)、五十肩4人(いずれも片麻痺)であった。X線所見で異常の認められたもの12人中、肩板の石

灰化7人、骨頭部骨萎縮・骨硬化・骨棘形成が5人であった。(表3)

治療及び成績を検討してみるに、成績は治療開始後疼痛の軽減・可動域の改善など患者が軽快または完治したものを良とし、不変または確認出来なかったものは除外した。表4によるとステロイド注射とリハビリテーションを主体に治療したものが最も成績がよい。殊に五十肩ではステロイド注入を施行しないと殆ど改善が望めないように思われた。肩関節周囲炎は疾患の軽重もあるが鎮痛・消炎剤またはリハビリ単独施行の場合は成績が劣り、双方の組み合わせ、重症例にはステロイド注射の併用が望ましいことが判明した。(表4)

症 例 供 覧

症例1 55才主婦 農業 右肩関節周囲炎(肩板石灰化症)

昭和51年10月22日夜、何ら誘因なく突然右肩関節痛を訴え夜も眠れぬ状態が続き、10月25日来院した。来院時右肩関節の腫脹あり、

自動的、他動的にも肩関節の運動は全く不能で肩関節外側に圧痛を認めた。X-P所見で右肩関節三角筋下包の石灰化像と大結節部の骨硬化像を認めた(写真1)。圧痛部にステロイド注射を行うと直後に肩関節は90°まで他動的に挙上可能となった。ホットバックを5日間行い、鎮痛・消炎剤の投与により6日後には肩関節の運動は全く正常になり疼痛も殆ど消失した。

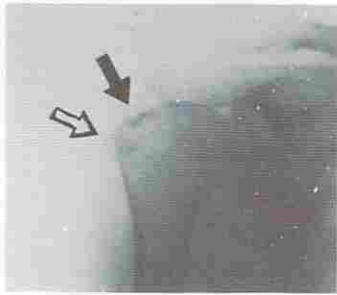


写真1 症例1のX線所見。三角筋下包の石灰化(□)と大結節部の骨硬化(◆)を認める。

症例2 52才 主婦 農業 右肩関節周囲炎(肩板石灰化症)

3年前山へ仕事に行き右肩を打って以来、右肩関節痛があり最近増強したので昭和51年10月1日当科来院、肩関節の前挙160°、側挙150°、内旋で強く疼痛を訴えた。X-P所見で右肩板石灰化像を認めたので(写真2)、ステロイド注射、ホットバック、機能訓練を行なったが疼痛は改善しなかった。10月18日手術施行。局麻下に切開し三角筋を分けると肩峰直下に7×7mmの嚢状の腫瘤が表われた。周囲から剝離、摘出した。腫瘤の内容は白い顆粒状の石灰が充満していた。術後疼痛は消失し、1ヵ月後には肩関節運動は正常で結髪、結帯も可能になった。



写真2 症例2のX線所見。肩板下包の石灰化(左)と手術により摘出後(右)。

症例3 52才 男 運転手 右五十肩

50年3月から項部～右上肢にかけて疼痛、右手背の知覚過敏があり頸腕症候群の診断で51年9月7日入院、加療により症状は寛解したが右肩関節痛と運動制限を訴えた。前挙100°、側挙90°、後挙20°、内旋は全く制限され、結髪・結帯も出来なかった。側挙では肩甲骨も同時に外側へ移動し肩関節の癒着を思わせた。(写真3)ステロイド注射9回とりハビリを行うも全く改善をみなかったので51年11月30日、静脈麻酔下にマニプレーションを施行したところ、バリッという音と共に癒着が剥れ、肩関節は各方向に他動運動可能となった。術後1週間右手頭に挙上、固定した。術後2週では肩関節の運動は前挙170°、側挙170°で殆ど正常になった(写真4)



写真3 症例3 術前の右肩関節の外挙。



写真4 症例3のマニプレーション後の右肩関節外挙。

考 察

肩関節の疼痛・運動制限で睡眠障害、労働困難など訴える患者もありその悩みは深刻である。著者の調査で感じたことは本疾患患者の占める割合が毎年増加傾向にあることで、人口の老令化、過重労働負担が原因のように思われる。しかしその治療はステロイド注射、近代的リハビリテーションの併用により確認

し得ただけでも50%の改善率をみた。悪化、不変症例に対しては症例2、3の如く外科的手術、マンブレーションなどの手段により積極的に治癒できるものと期待される。しかし患者の理解・熱意にも欠け最後まで治療を任せて貰えない例は反省の余地もある。

結 語

いわゆる五十肩について五年間の患者動態と治療の成績を検討し、若干の症例を供覧した。終わりに御指導、御校閲下さいました当院院長一柳兵蔵博士に深謝します。

文 献

- 安達長夫：いわゆる五十肩について整形外科、
22, 410—422, 1971
- 福田玄英：上腕二頭筋長頭腱々鞘炎、整形外科、
23, 933—937, 1972
- 神中正一：神中整形外科学、南山堂
550—558, 1971
- 片山良亮：片山整形外科学、中外医学社、
Vol6, 86—127, 1971
- 岡部芳博：五十肩の治療成績について、
臨床整形：7, 735—740, 1972